ホトトギス

一月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成二十七年一月一日発行（第百十八卷第一号）

俳句随想〔三百九十一〕

汀　子

送り仮名についてご質問があった。「昔は余り送り仮名をつけていません。最近は送り仮名を入れて読みやすいようになって来たようです。『かおり』を『香』と書いて『かおり』と読ませてきました。この『香』に『香り』と『り』を送り仮名が要るように思って入れました」と書かれてあった。名詞の場合送り仮名を入れないことが多いが、近年、読みやすくするために送り仮名を入れている辞書もある。その場合、辞書には括弧で閉じていることがある。それは入れても入れなくてもいいということであろうか。言葉は何時の間にか変化する。

昔は「季題」としか言わなかったのが、今は「季語」という人がいる。伝統俳句、ホトトギスでは「季題」と言い「季語」とは言わない。新傾向俳句を提唱し、アンチ虚子であった大須賀乙字が「季語」と言い始め文部省に浸透させたと聞いた。何も目くじらを立ててまで反論する必要がないかも知れないが、「季題」と「季語」の重みは全然違うと私は思っている。言葉というのは時代とともに変わるのかも知れないが、絶対に守らなければならないものもあることを知って欲しい。送り仮名についてのご質問は、付けたければつけてもいいが、昔ながらの様に付けないで読める名詞も私は良しとしたい。

俳句には送り仮名は無いほうがいいと私は思っている。それも臨機応変に作者本人の希望に添って判断して行くようにしている。

日本語は難しいが、それだけ奥が深い。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十六年一月　朝日新春詠

上木のその日待たるる松の内
初明り見馴れし庭の改る
片づかぬ書斎に馴染み去年今年

一月四日　芦屋ホトトギス会

寒牡丹早々咲いてしまひけり
皆知つてゐる年玉の中味かな

一月五日　下萌句会

一月のすでに二三の予定済み
嫁が君とて住み難き世なるべし
年越してしまひし二三ありぬべし
一月になればと思ふだけのこと

一月六日　ロイヤル俳壇

何も彼もあるがままなる初明り
来ては去る常の如くに初雀
福寿草より改る心あり
大都会動き出したる初明り

一月九日　工業倶楽部

七種を祝へば待つてゐる旅路
年賀述べ忽ちかかる仕事あり
元日と思ひゐし間に暮れにけり
七種の揃はぬままに炊かれけり

一月十四日　大阪倶楽部

寒の内とても出卦ける用多く
三日目は一人に戻る雑煮かな
書初のいつもの癖もめでたけれ
寒の内忘れてをりし用二三
書初といふも仕事の一つかな
書初の墨色を先づととのへし

一月十四日　綿業倶楽部

やうやくに少し日脚の伸びしこと
去年今年家族揃へば又別れ
結局は稿債励み去年今年
東京の五時の日脚の伸びしこと
上梓せしことに尽きたる去年今年

一月十五日　祝　黒川若子様　御結婚

若草の萌ゆる大地に抱かれて

一月十五日　夏潮句会

庭師来て焚火奉行を司る
関西は十五日まで松の内
美人かも知れぬ消えたる雪女
焼べ足して足して焼諸出来上る
用意せしとんど一年ふり返る
焼諸に尽きる火遊び松の内

一月十六日　清交社

七種を祝ふ句心新しく
一日を北へ南へ初句会
若者に元気を貰ふ去年今年
遅れ来し口実要らず初句会
雪のこと心にありて峠越え

一月二十二日　有恒俳句会新年会

快晴の冷たき空気纏ひ来し
池の水凍ててほどけて客を待つ
新春の明るき空でありしかな
俳諧のふえ待春の庭となる
松過の気分なかなか戻らざる

一月二十二日　無名会

松過の時間忽ち過ぎてをり
旅多き日々を思ひぬ松過ぎて
今日のこと今日を余して去年今年
六甲に近き凍空ゆるびけり
待たせたる時間はや過ぎ初句会

一月二十三日　きさらぎ会

寒ぬくしとはやうやくに今日のこと
寒明の待たるる旅路ありにけり
上木を謝す言葉より初便
寒晴の俯瞰全き富士の山
なほつづく新年会でありしかな
祝ぎの会待ち春を待つ心かな

一月二十四日　時雨会

上京の早出に雪の止んでをり
寒月に従ふ星のありしこと
降り出して消ゆる早さも雪のもの
麦の芽と気づく遠さのありにけり
明日の旅雪の心配なかりけり

一月二十五日　偲ぶ会

寒林の明るさ富士の見えしより
雪ありしこと峠路の告げてをり
富士右に左に峠春隣
風音のいつもどこかに雪の富士

一月二十六日　偲ぶ会

朝月の細し寒星従へて
刻々と明けゆく熱海春隣
快晴のはじまる月と星凍てて

一月二十八日　淡路島青嵐顕彰へ投句

第五回迎へる努力春めきぬ
島を訪ふ日の近づきて暖かし
波音を聞き早春の島へ旅

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年一月四日　芦屋ホトトギス会

八十路より五十路へ渡すお年玉
人声に開いてゆきし寒牡丹
玉砂利の音に明けゆく初詣

一月五日　野分会芦屋例会

煮凝に染まりゆく炊きたての飯
煮凝や三十年を連れ添うて

一月八日　カトリック新聞選者吟

ゴシックの聖堂暗め片時雨

一月九日　土筆会

山始斧煌いてをりにけり
風冴ゆる今夜も潜る縄のれん
気紛れな君気紛れな僕冴ゆる
斧入るる音冷えびえと山始

一月十三日　朝日カルチャー若草句会

初鴉とんと仮設のトタン屋根
初暦捲れば心竹の叫び
初暦君の誕生日に丸を
寝正月ベッド砦となつてをり
待春のカテドラルめく都庁かな

一月十四日　「天地」新年会祝句

俳徒てふ自覚忘れず初句会

一月十五日　蕉心会

小正月には新調の背広着て
凍蝶に雲は無情に日を閉ざす
寒天に貼り付いてゐる雲真白
小正月水面緩んで来りけり
寒の雲引つ張つてゐる鴉かな
懐手にて蕉像は夜動く
雪雲に戦いてゐるビルの先
早梅の二輪空恋ふ角度かな

一月十六日　登高会

句碑の文字掠めてとんと寒鴉
寒鴉人の後ろといふ死角
寒鴉今日も銀座の朝の顔
三井寺の鐘の余韻にある淑気

一月十九日　野分会東京例会

飾海老猫が狙つてをりにけり
飾付け赤いベンツでありにけり
煮凝を前にけんくわの収まりぬ

一月二十日　北國文芸選者吟

副都心空を狭めて初鴉

一月二十二日　目黒学園句会

寒雀群れれば恐いもののなし
小正月名刺をそつと差し出して
恋人を紹介したる小正月
小正月とは裏口の賑はへり
寒雀地球の鼓動啄めり

一月二十二日　梅花祭選者吟

梅が香やもう会ふことの出来ぬ君
寒風に剥がされてゆく富士の白
この寒さ一句授かるまでのこと
山頂は強風麓春隣
虎落笛世界遺産の叫びとも
雪女木花之開耶姫に化け
悴むや実朝の歌碑遠過ぎる

一月二十六、二十七日　年寿会

秋桜子句碑は三寒海四温
吊橋で腰抜かす犬冬うらら
白波も待春の音奏で伊豆
消防車夜番に廻る下田かな
祝ぎ心胸に響きて寒灯下
朝光にらふ梅の香の解け初む
我に似し龍馬の腹や懐手

一月二十八日　若水句会

いそいそと来てそそくさと女正月
万両やもうこれよりか負かりまへん
風の端万両磨き上げてをり
寒月や地震の記憶の語部に

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

夢覚めてまだ竹夫人抱いてゐし　相模原　木村享史
一丁目だけにありたる雹の害　同　同
焼酎の夜はワインの夜とは別　長岡　安原葉
一瞬のためらひもなく星とべり　同　同
山の宿出でて銀河に溺れけり　櫃原　稲岡長
露けしや大樹囲める山の寺　同　同
松島の寝待の月に会ひ得たる　福山　竹下陶子
紫も地味な紫時鳥草　同　同
秋刀魚焼く煙も立たず味気なし　神戸　山田佳乃
中元の重さにこもるこころざし　同　同
これまでの秋これよりの卒寿かな　東京　田丸千種
存問の詩に明け暮れ生身魂　同　同
金風や城下に海も山もあり　同　同
城跡に潜むものあり露葎　同　同
黄は側女白武士か秋の蝶　同　同
空缶のカランところげ秋暑し　同　同
大花火までの暗闇整へて　同　同
落書のやうな水脈引くボートかな　同　同

松島に島の数だけ秋ありて　同　後藤立夫
和久傳の送火の日のお品書　同　同
韮の花人はこまごま気を遣ふ　龍ケ崎　今橋眞理子
風筋の中よりはたと今朝の秋　同　同
初秋のかそけき色をつづりをり　八尾　山下美典
稲妻のはるかなるまま遠ざかり　同　同
鴨川の幅だけ秋の立ちし風　奈良　古賀しぐれ
迎火を焚けば逸りぬ瓜の牛　同　同
かまきりの保護色に見し秋の色　熊本　岩岡中正
住吉は海の大神鰯雲　同　同
空に雲大地に稲の波打てり　袋井　湖東紀子
爽やかや雲風のやう水のやう　同　同
渾身の一稿をはる夕立かな　徳島　岩田公次
一稿ををへ空蟬のごとくなり　同　同
一と夕立過ぎ屈強の松となる　香川　湯川雅
走馬灯昔の闇に戻りゆく　同　同
濡れ縁を隔てて闇や走馬灯　同　同
会へば又姉妹に戻り盆の月　同　同
考への翼を得たるハンモック　同　同
ハンモック瀬音が睡魔送り来る　同　同
庭に揚げ大きな藻刈舟となる　同　同
浮かばんとしたる海月を叩く雨　同　同
雨脚の届かぬ深さへと海月　同　同
霧の底霧の底へと沖潜る　同　同

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（十二月号より）

雅　・佳乃・霜衣
純也・くに彦・しげ人
さい雪・仁義・一歩
公次・廣太郎

外したる蚊帳子供らの海となる　東京　河野美奇

今ではあまり見かけなくなった蚊帳ではあるが、田舎の家の広間などでまだ吊っているかと思う。

朝、四隅から外して蚊帳を畳もうとするが、波打たせて畳む蚊帳が小さな子供には嬉しくて仕方がない。夏休みなんかで、その家の子供だけでなく、親戚の子供などが一緒だと、止めようもなく、さながら海となった蚊帳の上を泳ぎ回る。ひとしきり蚊帳の海で遊んでから、蚊帳の端を持ってきては、畳むのを手伝った積りでいる。

蚊帳という小道具で微笑ましく愉快に詠まれていて、嬉々として、はしゃぐ子供たちの夏の朝の情景が見えるようである。（雅）

最近はめっきりこの「蚊帳」を吊る家は減ってきたと思うが、筆者は正にこの句の情景の当事者であった。夏の朝起きると、親は吊っていた蚊帳を天井から外し、床にどさっと広げるが、その形がまるで水面なのだ。子供達はその柔らかさも相俟って、気持ちよく泳ぐ、いやのた打ち回るのだ。（廣太郎）

蟻の道遠くローマへ通ずるか　徳島　岩田公次

「すべての道はローマへ通ず」という諺を踏まえての一句だが、その遥かに遠いローマと蟻の小さな列の対比が面白い。どんな方法を使っても辿りつく真実は一つという意味で、どの蟻の道も最終的には巣に辿りつくのである。眼前の蟻の道が結構長く続いていたのだろうか。どこまで続くのだろうという素朴な疑問に作者の童心が見え隠れするようだ。（佳乃）

ローマ帝国全盛の頃の言葉として余りにも有名であるところの「総ての道はローマに通ず」をうまく季題とマッチさせている句である。この言葉のたとえから考えても、確かに蟻ひとつも目的を持って「蟻」は黙々と働いているのである。健気な生態も伝わってくる。（廣太郎）（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

沢子選

何事も過ぎて今年の秋の風　大阪　佐土井智津子
颱風の過ぎて六甲山残る　同
朧月吉野の招く一過客　東京　稲畑廣太郎
一片も散らぬ桜の疎ましく　同
みちのくの旅の近づく夜々の月　長岡　安原葉
みちのくの再会約す月の友　同
露けさを踏みて一人となる小径　龍ケ崎　今橋眞理子
ふとやみてまた初めから鉦叩　同
とつとつと語れる虚子や子規忌来る　東京　今井千鶴子
虚子と居て我若かりし子規忌かな　同
門火高く方向音痴なる妻に　相模原　木村享史
妻乗せる真菰の馬に金ンの鞍　同
白銀の露と生まるる今朝の雨　東京　山田閏子
赤のままはびこるほどになく群るる　同
おしろいの花の匂ひの夕べかな　橿原　稲岡長
渇きたる身に染み渡る西瓜かな　同
木洩日の奥へ奥へと葡萄狩　神戸　三村純也
己が香の中に揺れゐる女王花　同

高原の秋急かしをり雨意の風　東京　河野美奇
光太郎山廬包みて虫時雨　同
病上りには竜胆の濃過ぎたる　神戸　後藤立夫
もう九月芒を活けておはぎ出て　同
末の子の夢見て育つ鹿の子百合　熊本　岩岡中正
尊しと思ふ工事現場の汗　同
露の世に復興といふ力寄せ　宝塚　水田むつみ
旅終へて二十三夜の家居かな　同
灯したる燭に新涼宿りけり　金沢　藤浦昭代
迎鐘撞く新たなる魂多く　同
敬老の日に母の句は白紙かな　東京　八木裕子
敬老の日に久々の笑顔かな　同
わが果は花鳥諷詠白絣　福山　竹下陶子
安らぎてあれば涼しき卒寿かな　同
盆の月受話器しづかに置かれけり　東京　相沢文子
ひとすぢの秋風に雨上がりけり　同
盆石に鮎の遡上といふ景色　神戸　後藤比奈夫
文字摺の花が次第に渇筆に　同

PDF= 俳誌の salon

模様替

稲畑汀子

東京にある私の仕事部屋は、母が住んでいた縁で手に入れたマンションである。時期を違えて購入した三つの部屋は、それぞれの目的で使い分けしている。八階は靴のまま上がれるように改造して、句会場や、会議室に使っている。四階は今はゲストルームとして使い、五階の部屋は、私の拠点として泊まれるようにしてある。そこはベッドルームが二つあり、寝室の一つは次男の深二郎が来て泊まれるようになっている。私の寝室は部屋の殆どをベッドが占めて、引き出して使う化粧台の椅子が置けないのでベッドの端に座って使っている。東側の少し広い空間には十人ほど座れる机が置かれ少ない人数の会議が出来る。そこで山会という文章会もする。母から貰ったソファーが一劃を占め、その横には四角いテーブルが置かれ、四人の食事の出来るスペースがあって、食事はそこですることにしている。東側の広いスペースは仕切りが無いので北側の壁に寄せて細長いテーブルが備えられてあり、そこはパソコンやワープロが置かれていて私の仕事スペースになっている。整理をすれぱ、もう少し使い易くなるのであるが、次次物を置いて仕事のスペースが無くなっている。廊下の西の突き当たりはお風呂と洗面所とお手洗いがある。全体に見ると結構使い勝手がよく、私は満足しているのであるが、何となく寝室の狭いのが気になり何とかしたくなっていた。

私は元気があると、昔から部屋の模様替がしたくなる。したくなって考え出すと直ぐ実行に移す。周りの人はいつも呆れるが呆れながら心得ていてまた始まったと承知している。

「好川さん、東京の私の寝室の模様替をするために倉知さんに連絡を取って頼んで頂けないかしら」

東京の部屋の設計をして下さった好川さんに電話を掛けた。

「承知しました。寝室の図面をファックスしますから、どのような配置にするかご希望をお知らせ下さい」

すぐにファックスが届いたので、私の希望を描いて送り返した。

「テレビの場所を替えるのですね。ベッドの向きを替えて頭を南側にするならばテレビは北の壁に移して固定するようにしましょう。早速倉知さんに連絡を取ってみます」

好川さんはすぐに連絡の労を取って下さった。

「あーあー、また私の模様替病が始まったのだわ」

何となく元気が出て来て嬉しくなった。

「でも、溜まった仕事をしなければ」

どかんと送られて来ている句稿の選や、芦屋の書斎の片付けの

ほうが先ではないかとは思うが、次々送られてくる仕事に押しつぶされそうになりながら

「模様替なんて！」

私の頭の隅の何処かが叫んでいるのだがもうとまらないのである。

東京の寝室の模様替が済んだ。入口の正面にある寝室のドアを開けてもすぐにはベッドが見えないようになった。

東京で新しく始めた少人数での俳句会は、五階のマンションの部屋を使ってすることになった。アネモネ句会という名前に因んで、美奇さんにお願いして作って頂いたアネモネの造花の花籠を、私の寝室のドアの横へ白いテーブルに置いて飾ると、入り口のドアを開けた時にぱっと華やいで見える。

「初めっから、ベッドの位置をこういう風にしといたらよかったのに、この方が広く見えていいじゃないの」

東京に住んでいる妹がマンションに来たついでに覗いたからと言って、芦屋に帰っていた私に電話を掛けてきてくれた。